

# 戦争体験談(大東亜戦争)

みぞぐちしんいち  
溝口信一さん

私は、昭和5年生まれです。子ども時代は戦争の真っ最中です。

大東亜戦争末期で戦況はますます厳しくなってきた昭和20年、私は、当時国民高等小学校2年生（今の中学2年生）で、毎日、忠魂碑や奉安殿前で一礼して8キロの道を学校に通っていました。しかし、14歳の春、2月10日に3月の卒業式を待たず兄二人を追って、志願兵として一路関東北東部へ入隊することになりました。満二十歳になっていない学生でしたので、「満蒙開拓青少年義勇軍」いうことで志願兵として訓練を受けることができました。上の2人の兄は、すでに戦争真っ只中。私は、水戸の近く「義勇軍内原訓練所」へいくことになり、当時一軒から兵隊に3人も行っていたので、自宅の屋敷林には日の丸の旗が揚がっていました。いよいよ父母との別れの日になり、村人たちに万歳、万歳と盛大に見送られ、「勝ってくるぞと勇ましく」と村の氏神様前で、餞別をもらい送られました。時の餞別（餞むけ）は、1戸30円の時代でした。

14歳今の中学2年ですから、寂しくなって、お腹がすいてホームシックになりながらも、関東のからっ風の寒さと飢えに耐えていました。朝、軍隊の朝食だけではおなかが空いて動けなくなるので訓練に向かう途中で山菜みたいなものを採ったり、農家の人たちにジャガイモやサツマイモをもらったりして空腹を紛らわしていました。

作業を終わって帰る時は、いつも「勝ってくるぞと勇ましく」などと軍歌を歌って兵舎へ帰ってくる。それは日輪兵舎といって真ん丸い建物で、夜8時半くらいには高い櫓の上で消灯ラッパを鳴らして、消灯の合図。朝になると6時半くらいに、今度は起床ラッパが鳴るわけです。ラッパが鳴ると何が何でもみんな駆け出して全部整列し、点呼です。

あるとき、兵舎にいた夜中にB52という爆撃機が飛んできて、ダダダーという音とともに砲撃を受け、とても怖い思いをしました。そういう生活を半年、厳しい訓練と空腹とに耐えながら頑張っていました。まさか日本が敗けるなんて全く信じられなかったのです。

だが、同年8月15日未明にガーガーと雑音がするラジオから、途切れ途切れに敗戦の玉音放送があり天皇陛下の言葉。皆が男泣きして伏せったものです。「勝ってくるぞと勇ましく」と勇んで来たからには、おめおめと負けて家に帰るわけにはいかない。そういう惨めな思いでした。

戦中当時のラジオ放送は、大本営発表で勝ち戦の放送が非常に多かったように思います。また、戦況と同じに悲しい歌も流れてきました。それは「海行かば」という歌です。

海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍

大君（天皇）の辺にこそしなめ かえりみはせじ

本当は、終戦が1か月ほど遅かったら、私も渡満という満州に渡満することになっていました。1人の兄は南方の方、その上の兄も通信兵として外国に行っていました。8月15日の終戦の日から、3～4年のうちに私たち兄弟3人は、国内外から体ひとつで父母の元へ帰郷しました。

「国破れて山河在り」とか、山や川は何変わりなく迎え入れてくれましたが、30戸ある村に3柱の戦死者が出ていましたので、父母は私たちが無事に自宅へ帰ったことで大変肩身が狭い思いをしました。そういうこともありました。いよいよ日本は、食糧難、衣食住が大変な時代に突入し、兄2人は千葉県の子通市の工場へ口減らしの修行にだされたのでした。

そうして学童たちは、進学をあきらめ就職列車に乗って都会へと進み、国のために必死に働くことになります。そうして、高度成長時代に突入し、日本は復興していくのです。そういう時に歌われた、井沢八郎の『ああ上野駅』は今でも懐かしく思われます。

今、日本は豊かになり、みなとても平和な生活を過ごしてるけれど、はた

して平和とは…。戦争とは…。色々と思うところもあります。

①敗戦において、もし北日本と南日本が38度線の板門店のように、またドイツの鉄のカーテンのように分断されていたとすれば…。今の日本はどうなっていたでしょう。

②アメリカ無くして自国を守れるかどうか。憲法9条を守れ。沖縄の海山をまた汚すな。という思いです。

③靖国へのお参りは、心あらば見せびらかさず、故人の身近な菩提寺に感謝を込めて心あるお参りをしてあげれば、関係国からの言動を少しでも和らげ、友好国に戻るのではと思います。

④終戦については、あまりに勝ち目がなくなったことが分かっていた偉い軍部の方々が、お国のために諦めて潔く一日も早く手を上げるべきだったのです。

⑤最後の挑戦は、休日の土曜日の夜中にアメリカの軍港であるハワイのヨットハーバーで、日本がアメリカ艦隊を狙い打つ機上攻撃を行いました。山本五十六海軍大將は、事前に日本に勝ち目のないことを悟っていたのではないのでしょうか…。大將は、南方視察途中で機上で撃たれて戦死し、死後、元師となり国葬されましたが、生まれ故郷の新潟県にある山本五十六記念館には、当時乗っていた零戦が展示されています。

日本本土への攻撃の目をそらすため、真珠湾を闇討ち決行したのですが、蜂の巣の如くアメリカは許さなく、最後は長崎と広島への原爆投下となって終戦となったのです。